大学文書館へ行こう

第18回「オリンピックと北大」

北海道大学大学文書館　井上　高聡

工学部前歩道の2021年東京オリンピックのマラソン30Km地点銘板

オリンピックとの縁

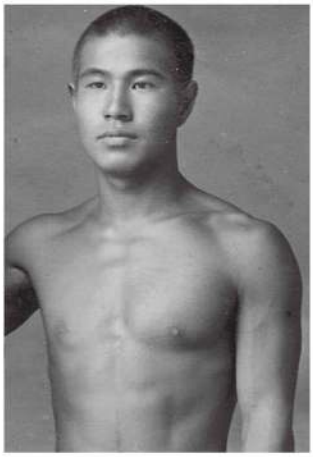
喧しかったオリンピック招致話も終息に向かっていますが、北大とオリンピックは、何かと浅からぬ縁があります。二〇二一年の東京オリンピックで、北大構内がマラソンコースの一部となった狂騒は記憶に新しいところです。一九七二年の札幌オリンピックの際には、選手強化を目的とし、国・自治体・関連団体などが参画して「北海道大学スポーツトレーニングセンター」を設置しました。ナショナルトレーニングセンターの類のはしりです。その後、北大では長らく「体育指導センター」として親しまれ、現在は先祖返りして「スポーツトレーニングセンター」と呼んでいる施設です。また、戦争のために幻に終わった一九四〇年の札幌オリンピックの誘致には、医学部教授大野精七が奔走し、大会実行副委員長も務めていました。

そして、北大は競技のパイオニアとなるオリンピック選手も輩出しています。

水泳の内田正練

一九一二年のオリンピック・ストックホルム大会に日本ははじめて出場しました。陸上競技の金栗四三と三島弥彦です。一九一六年のベルリン大会が第一次世界大戦の影響で中止となり、次の一九二〇年アントワープ大会に日本から水泳競技が初めて出場します。当時、北海道帝国大学農学部農学科一年に在学していた内田正練（一八九八～一九四五年）です。

内田は、浜松中学校（現浜松北高校）在学時から国内の水泳大会で優勝し、一九一六年に東北帝国大学農科大学（後の北大農学部）予科に入学した際には、「有名な河童が入学してきた」と噂になりました。プールのなかった当時、内田は豊平川で練習し、頭抜けた河童振りを見せたと言います。敵なしの内田は、オリンピック・アントワープ大会の百メートル自由形、四百メートル自由形に出場し、水府流の日本泳法で挑みますが、クロール泳法の前に惨敗しました。



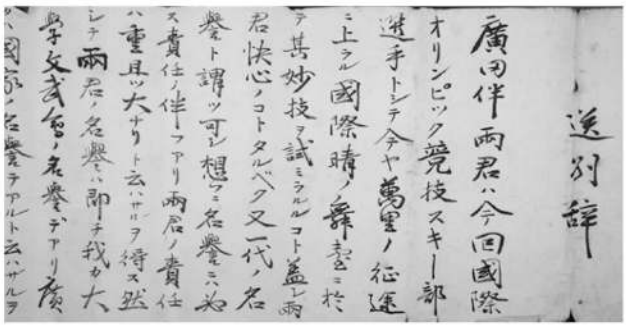
浜松中学校時代の内田正練

帰国した内田を北大では歓待して講演会を開催します。内田は三百名以上の聴衆を前に欧米のスポーツ界の実情、日本選手の失敗の原因を詳しく語りました。さらに、まだまだ武芸としての水泳が幅を利かす日本で、クロール泳法の普及をはかり、中等学校競泳大会を開催し、後進の指導に尽力しました。

スキーの伴素彦

予科医類に入学したばかりの廣田戸七郎らは、内田の活動に刺激を受け、内田に相談を持ち掛けて、一九一九年、予科に水泳部を設立します。廣田はスキー部にも所属していました。当時、水泳とスキーは共に全身運動であり、夏冬の季節競技であったことから、両方を掛け持ちする二刀流が多かったようです。

一九二八年、二回目の冬季オリンピックに当たるサンモリッツ大会、日本は冬季競技に初めて出場します。北大関係者からは、前年に医学部を卒業していた廣田戸七郎が監督、農学部農芸化学科三年伴素彦（一九〇五～九八年）がジャンプ、廣田と同期の医学部卒業生岡村源太郎がクロスカントリーの選手と決まりました。しかし、岡村は出場決定の直ぐ後、一九二七年十月に病気で亡くなり、出場は叶いませんでした。出発前、北大の文武会やスキー部は盛大な壮行会を開催します。伴は「倭小の日本人と雖も必ず皆さんの御期待に背かざる様ベストを尽くして戦います。……岡村君の意志を継いで奮闘しましょう」と挨拶しています。伴はサンモリッツ大会のジャンプ競技で三十六位と世界の壁に跳ね返されます。しかし、伴の経験は、一九三二年のレークプラシッド大会の山田勝巳、一九三六年のガルミッシュ・パルテンキルヘン大会の伊黒正次と、北大関係者のオリンピック出場に繋がっていきます。



送別辞

廣田伴両君ハ今回國際
オリンピック競技スキー部
選手トシテ今ヤ萬里ノ征途
ニ上ラル國際晴ノ舞台ニ於
テ其妙技ヲ試ミラルコト蓋シ両
君快心ノコトタルベク又一代ノ名
譽ト謂ツ可シ想フニ名譽ニ対
スル責任ノ伴フアリ両君ノ責任
ハ重且ツ大ナリト云ハサルヲ得ス然
レトモ両君ノ名譽ハ即チ我カ大
學文武會ノ名譽デアリ延
テ國家ノ名譽デアルト云ハサルヲ

伴素彦らのオリンピック壮行会の佐藤昌介総長送別辞（1927年12月1日）

現在、日本が得意とする水泳やノルディックスキー競技の黎明期において、北大からオリンピックに挑み、その経験を通じて競技の発展をリードする、そういった時代があったのです。